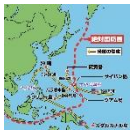
第三百二十三話　机上プランの防勢作戦！

対米英蘭戦の初期進攻作戦終了後の作戦は、米軍の反攻に際し、攻勢から防勢への態勢転換そして日本本土までの数線の要域を利用した防勢作戦である。それは端的に言えば、準備未完に乗じられての予期せざる戦いの連続であった。そこに日本的な弱点が内在してはいないか？(関連メモランダム：３２，９２，１１６及び２０３話)

１　戦略守勢態勢への転換

攻勢終末点を超えた初期進攻作戦の予期以上の進展により、更なる戦果拡張を期したミッドウェー作戦の惨敗、陸軍としては予期せざる戦場(ガ島)からの撤退、そして米軍の予期し得る反攻の緊迫もあって、昭和１８年の世界情勢判断（1943/2）をうけて,陸海軍は、従来の積極的作戦を止めて、米軍の本格的反攻に備えて防備を固めようとした。陸軍は、南東方面作戦中央協定に基づき、ニューギニアを重点として準備を進めたが、海軍は、中部ソロモンの重要性を強く主張したため陸軍部隊の増強を受けて海軍が中部ソロモンを防衛することとなった。

２　次期作戦の検討と絶対国防圏構想への転換（1943/9/30）



昭和１８年夏頃から①陸海軍の戦力を投入し飽くまでも現戦線を確保する。　②速やかに後方要域に後退し、計画的な反撃を企図する。　③極力現戦線で持久した後、後方要線計画的な反撃を行う。の３案が議論され、①案に近い③案と妥協が成立した。

斯くして決定された絶対国防圏構想は、「千島～小笠原～内南洋（中西部）～西部ニューギニア～スンダ～ビルマを含む圏域を絶対確保すべき要域」と定めた。

然しながら、連合艦隊は飽くまでも第３段作戦計画（Z 作戦）に固執し、陸軍が防備強化に努める要線から著しく突出した地域での決戦を企図していたのである。

３　マリアナ失陥と捷号作戦への移行（1944/10/18）

今後採るべき戦争指導の大綱（1944/8/19）に先立ち、陸海軍は「陸海軍爾後の作戦指導の大綱」を決定した。敵の主進攻正面により、比島（捷１号）、南西諸島・台湾（捷２号）、小笠原・本土（捷３号）、千島・北海道（捷４号）での決戦を予期した。

決戦兵力の中核は、航空戦力とされ、陸海軍の航空戦力を決戦要域に徹底的に集中し統合発揮することとされていた。相変わらず海軍は敵空母機動部隊の撃破を主張し、陸軍は敵輸送船団の一挙撃滅を狙っていた。

大本営は、１０月１８日捷１号作戦の発動を命じたが、航空作戦は成果を挙げえず、レイテ地上作戦も苦戦を強いられ、作戦は中止に追い込まれた。

４　天号（航空）作戦（1945/2/6）

東シナ海周辺海域に来攻する敵に対し、陸海軍の航空戦力を集中して出血を強要せんとする作戦である。１号から４号まであり、１号が発令。航空特攻や水上特攻が行われたが、戦勢を覆すには至らなかった。

５　決号作戦(未発令)　　本土防衛作戦である。

６　少々の卑見

（１）事前の計画なき防勢作戦は無理である。（２）陸・海の戦略思想の乖離は致命的（３）要域防御準備の余裕獲得のためには思い切った間合いの保持が必須（４）逐次の後退作戦は敵に乗ぜられやすい。（５）絶対国防圏崩壊時点で戦争終末を考えるべきでは？（６）なけなしの航空戦力を逐次に消耗させれらた。（７）各作戦計画は机上のプランとしては一見合理的であるが、現実に立脚しない作戦計画でしかなかった。（８）戦いながらの防勢準備は戦力的に無理だった。（９）間合いを切るには敵に一大痛撃の要あり（１０）追い込まれるほどネーミングが過激に？（１１）何れの時点で敗戦処理に動くべきか？（１２）統一性なき作戦ぞ悲しき　　（了）